

太宰府万葉 歌碑めぐり

遠^{とお}の朝廷^{みかど}と称された太宰府は、今も万葉びとの生命^{いのち}が息づいています。

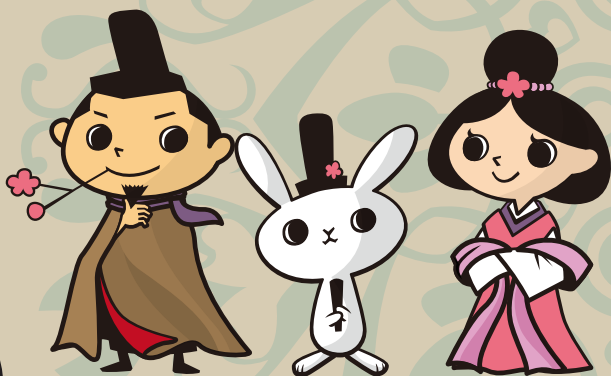
政庁跡・大野城跡・水城跡・観世音寺などの古跡^{こせき}にたたずむと、

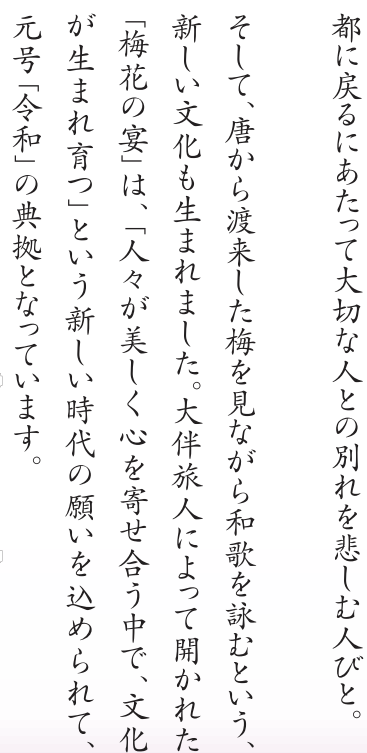
大伴旅人・山上憶良・沙弥満誓^{やまのうえのおくら}たちの歌声が、
^{しゃみのまんせい}

千三百年の時を超え、私たちの耳に響いてきます。

筑紫路を散策し、歌碑をめぐりながら、

万葉びとの息づきを感じとってください。





市内には、「令和」改元を記念して、4つの梅花の歌序文の石碑が建立されています。

大伴旅人は大宰帥（大宰府の長官）として赴任し、天平二年（七三〇年）、自身の邸宅に大宰府や九州諸国の役人らを招いて、当時大変高貴とされた梅の花をテーマに歌を詠む、「梅花の宴」を開きました。元号「令和」は『万葉集』梅花の歌三十二首序文にある、「初春令月、氣淑風和。梅披鏡前之粉、蘭薫珮後之香。」の文言を引用したものです。



大宰府市役所



大宰府政庁跡（大宰府展示館横）



坂本八幡宮



大宰府メモリアルパーク

【読み下し文】

天平二年正月十三日、帥の老の宅に萃まりて、宴会を申
 きき。時に、初春の令月にして、氣淑く風和ぎ、梅は鏡前の
 粉を披き、蘭は珮後の香を薫ず。加之、曙の嶺に雲移り、
 松は羅を掛けて蓋を傾け、夕の岫に霧結び、鳥は穀に封
 められて林に迷ふ。庭には新蝶舞ひ、空には故雁帰る。
 ここに天を蓋とし、地を座とし、膝を促け觴を飛ばす。
 言を一室の裏に忘れ、衿を煙霞の外に開く。淡然に自
 ら放にし、快然に自ら足る。若し翰苑あらぬときには、
 何を以ちてか情を攄べむ。請ふ落梅の篇を紀さむ。古と
 今とそれ何ぞ異ならむ。園の梅を賦して聊かに短詠を
 成す宜し。

（参考文献：大宰府市「大宰府市史 文芸資料編」）

【口訳】

天平二年（730）正月13日、帥老の宅に集まって宴会を開く。
 あたかも初春のよき月、気は麗らかにして風は穏やかだ。梅は鏡台の前のお白
 粉のような色に花開き、蘭草は腰につける匂袋のあとに従う香に薫っている。
 しかも、朝の嶺には雲が動き、松は雲の薄絹を掛けたように傘を傾ける。また
 夕の山洞には霧が立ちこめ、鳥は霧の縮み絹に閉ざされたように林に迷い飛
 ぶ。庭には生まれたばかりの蝶が舞い、空には去年の秋に来た雁が北に帰って
 行く。さてそこで、天空を覆いとし大地を敷物としてくつろぎ、膝を寄せ合っ
 ては酒盃を飛ばす如くに応酬する。一堂に会しては言葉忘れ、美しい景色に向
 かっては心を解き放つ。さっぱりとして心に憚ることなく、快くして満ち足り
 ている。詩歌を他に、この思いを何によって述べようか。詩には落梅の篇を
 作るが、古も今もどんな違いがあるう。さあ、園梅を詠んで、ここに短き歌を
 試みようではないか

（参考文献：岩波書店 新日本古典文学大系『萬葉集 二』）



ここにありて 筑紫やいづち
白雲の たなびく山の
方にしあるらし

卷四・五七四

原文 此間在而 筑紫也何處

白雲乃 棚引山之 方西有良思

作者 大伴旅人

口訳 ここ(大和)から見て、

筑紫はこの方角だろう。

白雲のたなびく山の方で
あるらしい。



我が園に 梅の花散る
久方の 天より雪の
流れ来るかも

卷五・八三二

原文 和何則能尔 宇米能波奈知流

比佐可多能 阿米欲里由吉能

那何列久流加母

作者 主人(大伴旅人)

口訳 わが家の庭に梅の花が散っている。

天から雪が流れて来るのであろうか。



万代に 年は来経とも
梅の花 絶ゆることなく
咲き渡るべし

卷五・八三〇

原文 萬世尔 得之波岐布得母

烏梅能波奈 多由流已等奈久

佐吉和多留倍子

作者 筑前介佐氏子首(佐伯子首)

口訳 永久に年は来て過ぎて行くとも、

梅の花は絶えることなく
咲き続けることであろう。



妹が見し 棟の花は 散りぬべし
我が泣く涙 いまだ干なくに

卷五・七九八

原文 伊毛何美斯 阿布知乃波那波

知利奴倍斯 和何那久那美多

伊摩随飛那久尔

作者 山上憶良

口訳 妻が見た棟の花は

もう散ってしまいそうだ。

私の泣く涙はまだ乾かないのに。



春されば まづ咲くやどの 梅の花
ひとり見つつや 春日暮らさむ

卷五・八八

原文 波流佐扎婆 麻豆佐久耶登能

烏梅能波奈 比等利美都夜

波流比久良佐武

作者 筑前守山上大夫(山上憶良)

口訳 春になると真つ先に咲く庭の

梅の花を、一人で見ながら

春の日を暮らすことであらうか。



しらぬひ 筑紫の綿は
身に付けて いまだは着ねど
暖かく見ゆ

卷三・三三六

原文 白縫 筑紫乃綿者 身著而

未者伎祢杼 暖所見

作者 造筑紫観音寺别当沙弥满誓

口訳 筑紫の綿は、

まだ身につけていないが、

暖かそうに見える。



8



7

瓜食めば 子ども思ほゆ
栗食めば まして俤はゆ
いづくより来たりしものそ まなかひに
もとなかりて安眠しなさぬ

巻五・八〇二

原文 宇利波米婆 胡藤母意母保由

久利波米婆 麻斯提斯農波由

伊豆久欲利 积多利斯物能曾

麻奈迦比尔 母等奈可利提

夜周伊斯奈佐農

作者 山上憶良

口訳 瓜を食べると子どもが思われる。
栗を食べるとまして俤はれる。

いったい何処からやつてきたのか、
面影が眼前にむやみにちらついて、
安眠させてくれない。

反歌

銀も 金も玉も なにせむに
まされる宝 子に及かめやも

巻五・八〇三

原文 銀母 金母玉母 奈尔世武尔

麻佐礼留多可良 古尔斯迦米夜母

作者 山上憶良

口訳 銀も金も珠玉も何になろう。
どんな優れた宝も子に及ぼうか。
及びはしないのだ。

おほきみ 遠の朝廷と あり通ふ
島門を見れば 神代し思ほゆ

巻三・三〇四

原文 大王之 遠乃朝廷跡 蟻通

嶋門乎見者 神代之所念

作者 柿本人麻呂

口訳 大君の 遠く離れた政庁として
通い続ける海峡を見ると、
神代の昔が思われる。



15



14



13

我が岡に さ雄鹿来鳴く
初萩の花 妻問ひに
来鳴くさ雄鹿

巻八・二五四

原文 吾岳尔 棹牡鹿来鳴

先芽之 花婦問尔 来鳴棹牡鹿

作者 大伴旅人

口訳 わが岡に雄鹿が来て鳴いている。
初萩の花を妻として訪ねようと、
来て鳴く雄鹿よ。

大野山 霧立ち渡る
我が嘆く 息その風に
霧立ち渡る

巻五・七九九

原文 大野山 紀利多知和多流

和何那宜久 於伎蘇乃可是尔

紀利多知和多流

作者 山上憶良

口訳 大野山に霧が立ちこめている。
私が嘆くため息の風によって
霧が立ちこめている。

おほ 凡ならば かかもせむを
忍みと 振りたき袖を 忍びてあるかも

巻六・九六五

原文 凡有者 左毛右毛将為乎

忍跡 振痛袖乎 忍而有香聞

作者 児島娘

口訳 あなたが普通のお方なら
あれこれいたしますが、
恐れ多いので、
振りたい袖をこらえています。

ますらをと 思へる我や
水荃の 水城の上に 涙拭はむ

巻六・九六八

原文 大夫跡 念在吾哉

水荃之 水城之上尔 泣将拭

作者 大伴旅人

口訳 立派な男だと思っている私が、
水城の上で涙をぬぐうことだろうか。



やすみしー 我が大君の 食す国は
大和もここも 同じと思ふ

原文 八隅知之 吾大王乃 御食國者
日本毛此間毛 同登會念

作者 大伴旅人
口訳 わが大君のお治めになる国は
大和もこの筑紫も同じだと思ふ。

あをによし 奈良の都は
咲く花の にほふがごとく
今盛りなり

原文 青丹吉 寧樂乃京師者
咲花乃 薫如 今盛有

作者 小野老
口訳 奈良の都は
咲く花が美しく薫るように
今が真つ盛りである。

正月立ち 春の来らば
かくしこそ 梅を招きつつ
楽しいき終へめ

原文 武都紀多知 波流能吉多良婆
可久斯許曾 烏梅乎岐都

作者 大式紀卿(紀男人)
口訳 正月になり春が来たなら、
こうして梅を招きながら、
楽しさの限りを尽くそう。

よのなか
世間は 空しきものと
知る時し
いよよますます 悲しかりけり

原文 余能奈可波 牟奈之伎母乃等
志流等伎子 伊与余麻須万須
加奈之可利家理

作者 大伴旅人
口訳 世の中はむなししいものだといふく
知る時、いよいよますます悲哀の
感を新たにすることだ。



秋の野に 咲きたる花を
指折り かき数ふれば
七種の花

原文 秋野尔 咲有花乎

指折 可伎數者 七種花 其

作者 山上憶良
口訳 秋の野に 咲いている花を
指を折つて 数えてみると
七種類の花がある

萩の花 尾花葛花 なでしこが花
をみなへし また藤袴 朝顔が花

原文 芽之花 乎花葛花 瞿麦之花
姫部志 又藤袴 朝兒之花 其二

作者 山上憶良
口訳 萩の花 尾花 葛の花
なでしこの花 女郎花
さらに藤袴 朝顔の花

梅の花 咲きて散りなば
桜花 継ぎて咲くべく
なりにてあらずや

原文 烏梅能波奈 佐企弓知理奈婆
佐久良婆那 都伎弓佐久倍久

作者 薬師張氏福子(張福子)
口訳 梅の花が咲いて散つたら
桜の花が続いて咲きそうに
なっているではないか。



太宰府歴史スポーツ公園

19 ~ 28



しろかね 銀も 金も玉も なにせむに
まされる宝 子に及かめやも

原文 銀母 金母玉母 奈尔世武尔
麻佐礼留多可良 古尔斯迦米夜母
作者 山上憶良
口訳 銀も金も珠玉も何にならう。
どんな優れた宝も子に及ぼうか。
及びはしないのだ。

巻五・八〇三

橘の花散る里の ほととぎす
片恋し一つ 鳴く日こそ多き

原文 橘之花散里乃 霍公鳥
片戀為乍 鳴日四曾多寸
作者 大伴旅人
口訳 橘の花の散る里のホトトギスは、
片恋をしながらかう鳴く日が多いことです。

巻八・四七三

湯の原に 鳴く葦鶴は
吾がごとく 妹に恋ふれや
時わかず鳴く

原文 湯原尔 鳴蘆多頭者
如吾 妹尔戀哉
作者 大伴旅人
口訳 湯の原に 鳴く葦鶴は、
私のように 妻を恋慕うからか、
時の区別なく いつも鳴いている。

巻六・九六一



21



20



19

いちしろく しぐれの雨は 降らなくに
大城の山は 色付きにけり

巻十二・三九七

原文 灼然 四具礼乃雨者 零勿國

大城山者 色付尔家里

作者 未詳

口訳 目立つほどに時雨は降らないのに、
大城の山は色づいたなあ。

妹が見し 妹の花は 散りぬべし
我が泣く涙 いまだ干なくに

巻五・七九八

原文 伊毛何美斯 阿布知乃波那波

知利奴倍斯 和何那久那美多

伊摩陀飛那久尔

作者 山上憶良

口訳 妻が見た棟の花はもう散ってしま
いそうだ。

私の泣く涙はまだ乾かないのに。

筑紫なる にほふ児故に
陸奥の 香取娘子の 結びし紐とく

巻二四・三四二七

原文 筑紫奈留 尔抱布兒由惠尔

美知能久乃 可刀利乎登女乃

由比思比毛等久

作者 未詳

口訳 筑紫の美しい娘ゆえに、
陸奥の香取娘子が結んでくれた
衣の紐を解くことよ。



28



27



26



25

いにしへ なな さか
古の 七の賢しき 人たちも
欲りせしものは 酒にしあるら

巻三・三四〇

原文 古之 七賢 人等毛

欲為物者 酒西有良師

作者 大伴旅人

口訳 古の竹林の七賢人たちも、
欲しがったものは酒であつたらしい。

玉くしげ 芦城の川を 今日見ては
万代までに 忘らえめやも

巻八・五三三

原文 珠匣 葦木乃河乎 今日見者

迄萬代 将忘八方

作者 未詳

口訳 蘆城の川を今日見て後は、
万代までも忘れられようか。

梅の花 散らくはいづく
しかすがに この城の山に
雪は降りつつ

巻五・八三三

原文 烏梅能波奈

志可須我尔 許能紀能夜麻尔

由企波布理都

作者 大監伴氏百代(大伴百代)

口訳 梅の花が散るとはこのことだろう。
それどころかこの城の山には
雪が降り続けている。

春の野に 霧立ち渡り
降る雪と 人の見るまで
梅の花散る

巻五・八三九

原文 波流能努尔

布流由岐得 比得能美流麻提

烏梅能波奈知流

作者 筑前目田氏真上

口訳 春の野に霧が立ちこめて、
雪が降っているのかと、
人が見間違えるほどに、
梅の花が散っている。



32



31



30



29

路の辺へ 壹師の花の いちしろく
人皆知りぬ 我が恋妻は
こひづま

原文 路邊 壹師花 灼然
人皆知 我戀嬬

作者 柿本人麻呂

口訳 道ばたのいちしの花ではないが、
いちしろくーはつきりと
人は皆知ってしつた。
私の恋い慕う妻のことは。

忘れ草 我が紐に付く
香具山の 古りにし里を
忘れむがため

原文 萱草 吾紐二付
香具山乃 故去之里乎 忘之為

作者 大伴旅人

口訳 忘れ草を私の下紐に付ける。
香具山の故郷を忘れるために。

春の野に すみれ摘みにと
来し我そ
野をなつかしみ 一夜寝にける

原文 春野尔 須美礼採尔等 来師吾曾
野乎奈都可之美 一夜宿一來

作者 山部赤人

口訳 春の野にすみれを摘もうと思つて
やつて来た私は、野に魅せられて
そこで一夜寝てしまった。

萩の花 尾花葛花 なでしこが花
をみなへし また藤袴 朝顔が花

原文 芽之花 乎花葛花 瞿麦之花
姫部志 又藤袴 朝兒之花 其二

作者 山上憶良

口訳 萩の花 尾花 葛花
なでしこの花 女郎花
さらに藤袴 朝顔の花



39



38



37

春の野に 霧立ち渡り
降る雪と 人の見るまで
梅の花散る

原文 波流能努尔 紀理多知和多利
布流由岐得 比得能美流麻提

作者 筑前目田氏真上

口訳 春の野に霧が立ちこめて、
雪が降っているのかと、
人が見間違えるほどに、
梅の花が散っている。

世間は 空しきものと
知る時し
いよよますます 悲しかりけり

原文 余能奈可波 牟奈之伎母乃等
志流等伎子 伊与余麻須万須

作者 大伴旅人

口訳 世の中はむなしものだつくづく
知る時、いよいよますます悲哀の
感を新たにすることだ。

大君の遠の朝廷と
しらぬひ 筑紫の国に
泣く子なす 暮ひ来まして

息だにもいまだ休めず
年月もいまだあらねば
心ゆも思はぬ間に

言はお術せむ術知らに
石木をも問ひ放け知らず
家ならばかたちはあらむを

恨しき妹の命の
我をばもいかにせよとか
にほ鳥の二人並び居

語らひし心そむきて
家離ります

神龜五年七月二十日

卷五・七九四



36



35



34



33

秋の野に 咲きたる花を
指折り かき数ふれば
七種の花

原文 秋野 咲有花乎

巻八・五三七

作者 山上憶良

口訳 秋の野に 咲いている花を

指を折って 数えてみると
七種類の花がある

春されば まづ咲くやどの 梅の花
ひとり見つや 春日暮らさむ

原文 波流佐礼婆 麻豆佐久耶登能

巻五・八八

作者 筑前守(山上憶良)

口訳 春になると真つ先に咲く庭の

梅の花を、一人で見ながら春の日を
暮らすことであろうか。

我が園に 梅の花散る
久方の 天より雪の

原文 和何則能尔 宇米能波奈知流

比佐可多能 阿米欲里由吉能

巻五・八三二

作者 主人(大伴旅人)

口訳 わが家の庭に梅の花が散っている。

天から雪が流れて来るのであろうか。

梅の花 散らくはいづく

しかすがに この城の山に

雪は降りつつ

原文 烏梅能波奈 知良久波伊豆久

志可須我尔 許能紀能夜麻尔

巻五・八三三

作者 大監伴氏百代(大伴百代)

口訳 梅の花が散っているとはこのこと。

それどころかこの城の山には
雪が降り続けている。

作者 山上憶良

大意 大君の遠い政庁として、(しらぬ

ひ)筑紫の国に、泣く子のように

慕つてやつて来られて、一息入れて休

む間もまだなく、年月もまだ経つ

ていないのに、死ぬなどとは夢にも

思わない間に、ぐったりと臥してし

まわれたので、言うすべもなすす

べも分らず、岩や木に向かつて尋ね

ることもできない。家にいたら無事

だったろうに、恨めしい妻は、この

私にどうせよと言うのか、にお鳥

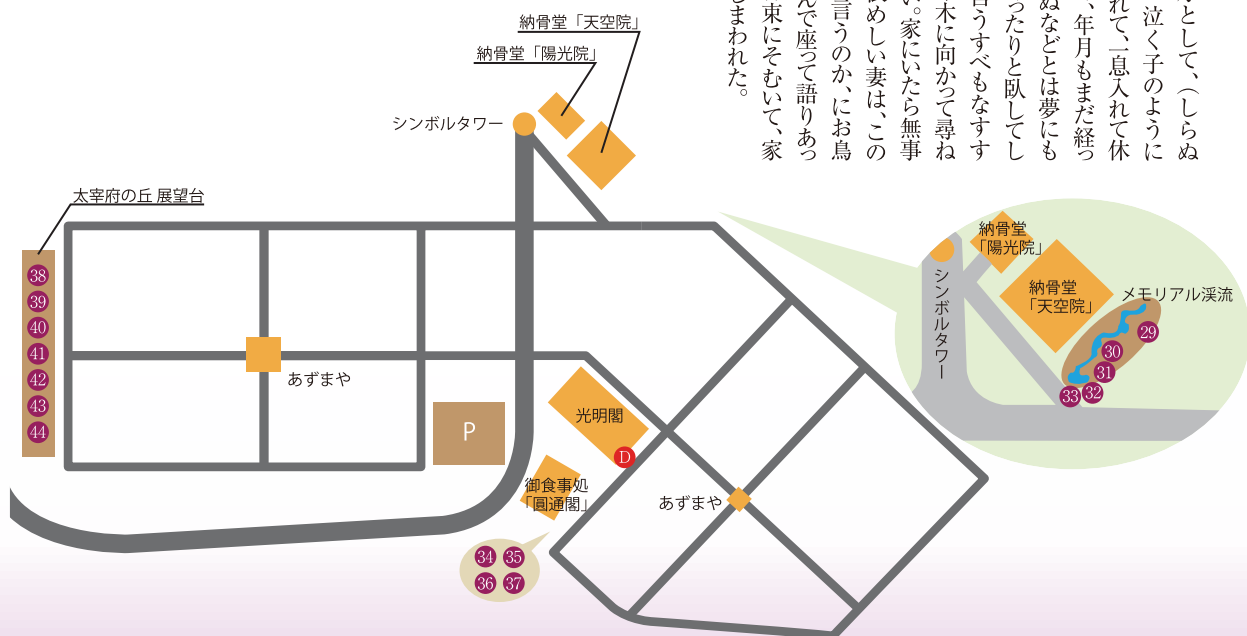
のように二人並んで座って語りあつ

た偕老同穴の約束にそむいて、家

を離れて行つてしまわれた。

太宰府メモリアルパーク

29 ~ 44





42



41



40

家に行きて いかにか我がせむ
枕づく つま屋さぶしく
思ほゆべしも

巻五・七九五

原文 伊勢尔由伎豆 伊可尔可阿我世武

摩久良豆久 都摩夜佐夫斯久

於母保由倍斯母

作者 山上憶良

口訳 家に帰つて、私はどうしたらいいのか。

寝室が寂しく

思われるに違いはない。

愛しきよし かくのみからに
慕ひ来し 妹が情の
すべもすべなき

巻五・七九六

原文 伴之伎与之 加久乃未可良尔

之多比己之 伊毛我己許呂乃

須別毛須別那左

作者 山上憶良

口訳 ああ、いとしなことよ。

こんなにはかない命だったのに、

私を慕つてやって来た妻の心が、

どうしようもなく哀れなことよ。

悔し^くかも かく知らませば
あをによし 国内^{くぬち}ことごと
見せましものを

巻五・七九七

原文 久夜斯可母 可久斯良摩世婆

阿乎尔与斯 久奴知許等其等

美世摩斯母乃乎

作者 山上憶良

口訳 悔しいことよ。こんなことになると

知つていたら、(あをによし) 国中を

すべて見せてやるのだつたのに。



43

妹^{いも}が見し 棟^{あふち}の花は 散りぬべし
我が泣く涙^{なみだ} いまだ千^ひなくに

巻五・七九八

原文 伊毛何美斯 阿布知乃波那波

知利奴倍斯 和何那久那美多

伊摩随飛那久尔

作者 山上憶良

口訳 妻が見た棟の花はもう散つてしま

いそうだ。私の泣く涙はまだ乾かない

のに。

大野山 霧立ち渡る
我が嘆く 息^{いき}その風に
霧立ち渡る

巻五・七九九

原文 大野山 紀利多知和多流

和何那宜久 於伎蘇乃可是尔

紀利多知和多流

作者 山上憶良

口訳 大野山に霧が立ちこめている。

私が嘆くため息の風によって

霧が立ちこめている。



44



このマークは、「梅花の宴」で詠まれた歌
『万葉集』の「梅花の歌」に収録されている歌です。



「万葉集つくし歌壇」は
市民遺産に認定されています。

発行・問合せ 太宰府市
編集 太宰府万葉会代表 松尾セイ子

題字 山内勇哲
監修 坂本信幸